

# 滋賀県南田 B 遺跡・九里氏館遺跡 出土小形仿製鏡・銅鏃の型式学的 検討と理化学的分析

Typological Study and Physicochemical Analysis of Small Mirrors and  
Bronze Arrowheads Excavated from the Minamida B Site and  
Kunorishiyakata Site in Shiga Prefecture

才本佳孝・戸塚洋輔・齋藤 努・若林邦彦

SAIMOTO Yoshitaka, TODUKA Yosuke  
SAITO Tsutomu and WAKABAYASHI Kunihiko

はじめに

① 分析・検討資料の出土状況について

② 南田 B 遺跡・九里氏館遺跡出土小型青銅器の型式学的検討

③ 近江八幡市所蔵青銅資料の鉛同位体比分析結果

おわりに

## 【論文要旨】

本共同研究のテーマである、弥生後期における小型青銅器の鉛同位体比が銅鐸などで指摘されている分析結果と整合的となるか否かが、本稿のテーマである。近江八幡市のご厚意により、同市九里氏館遺跡および南田 B 遺跡から出土した小型青銅器について分析を行った。

その前提として、分析対象資料の埋積時期を決める重要情報である出土状況、資料の型式学的検討、そして個々の鉛同位体比分析結果をしめた。結果として、いずれの小型青銅器も弥生時代後期末～古墳時代初頭に埋積していることがわかった。また、分析した小型青銅器の型式が型式学的検討により、南田 B 遺跡出土小形仿製鏡に関しては型式学的検討の結果弥生時代後期前葉の北部九州での生産が想定され、遺跡内で埋積までに一定期間があった可能性が指摘された。それと呼応するように、南田 B 遺跡出土銅鏡のみが鉛同位体比分析値が A 領域を示し、他の資料については a 領域に集中する結果をしめた。その結果、本研究で焦点の一つとなっている銅鐸にみられる鉛同位体の弥生後期以後の変化の方向性と同様の変化が、小型青銅器でもうかがわれることになった

【キーワード】 小型青銅製品, 同位体比分析・弥生時代後期